

2024 年度 山梨学院大学 卒業生調査報告

2024 年 11 月

学事課 IR 担当：潘秋静

学長補佐：倉澤一孝

1. 調査目的

山梨学院大学は、本学の教育活動等について検証・評価し、今後の教育や学生支援活動の充実を図るために IR 調査を実施している。

本調査では、過去 5 年間に本学を卒業した学生を対象に、本学の教育、学生支援、学修成果、また、卒業後のキャリアについて、卒業生を対象に調査を実施した。この調査は、卒業生の現状を把握するとともに、本学の教育活動の有用性について卒業生から評価を求めることによって、エビデンスに基づき今後の施策を検討することを目的として実施した。

2. 調査期間

2024 年 9 月 1 日～2024 年 9 月 20 日

3. 調査方法

アンケートに回答を依頼するメールを卒業生に送付し、Web アンケートシステム「Microsoft forms」を利用して回答を収集した。

4. 調査対象

- ✓ 調査対象：就職キャリアセンターの卒業生連絡リストに登録されている 4286 名
- ✓ 有効回収率：3.5%（回答：153 名）

5. 調査項目

- ✓ 第 1 部 回答者情報
- ✓ 第 2 部 大学時代の学習・生活から見た本学の教育効果
- ✓ 第 3 部 卒業後の就職・仕事状況から見た本学の教育効果
- ✓ 第 4 部 学習経験の総合評価と本学に対する愛着度

6. 調査結果の要約

<第 1 部 回答者情報>

- 本学の卒業生リストに登録されている 4286 名に回答を依頼し、153 名（3.5%）から回答があった。

- 回答のあった卒業生の卒業年度は、「2024年度3月卒」(24%)、「2023年3月/9月卒」(19%)が最も多く、次いで「2022年3月/9月卒」(17%)、「2021年3月/9月卒」(16%)、「2020年3月/9月卒」(11%)、「2019年3月/9月卒」(9%)の順である。
- 回答のあった卒業生の出身学部は、「法学部」39%が最も多く、次いで「経営学部」28%、「スポーツ学部」20%、「国際リベラルアーツ学部」8%、「健康栄養学部」8%、大学院3%の順である。
- 現在の住所を尋ねたところ、「山梨県」(28%)が最も多く、次いで「東京都」(17%)、「長野県」(9%)、「海外」(8%)、「神奈川県」(6%)、「埼玉県」(4%)や「千葉県」(4%)の順である。

<第2部 大学時代の学習・生活から見た本学の教育効果>

- 大学時代に卒業生が取り組んだ活動を、「5.熱心」「4.やや熱心」の割合でランク付けした結果、昨年度と同様にトップ3位は以下の通りとなった。

大学で熱心に取り組んだこと	割合	順位
a. 大卒の学歴を得るための必要な単位を取ること	75.8%	第1位
b. 専門分野に関する知識・技術を身につけること	70.2%	第2位
i. ゼミ	63.4%	第3位

- 一方、同じ質問に対して、大学時代に体験しなかったと回答した割合が高かった項目は昨年度の調査結果とも一致し、トップ3位も以下の通りとなった。

項目	体験しなかった割合	順位
k. 大学院への進学準備・勉強	78.4%	第1位
n. 留学や異文化交流	52.8%	第2位
j. 企業研修やインターンシップ等	26.1%	第3位

- また、同じ質問に対して、「体験しなかった」の割合と「不熱心」「やや不熱心」の割合を加算してみると、トップ3位は以下の通りとなった。

項目	加算後の割合	順位
k. 大学院への進学準備・勉強	81.7%	第1位
e. 留学や異文化交流	63.6%	第2位
e. 外国語の能力を身につけること（言語スキル科目）	47.1%	第3位

- 本学は、社会で活躍できる広い国際的視野を持ち、実践的な知識と技能を備え、創造力と行動力を発揮できる人材の育成を目指している。この観点から、多くの学生に対し、留学や異文化交流の機会を提供すること、それに加えてこれらの活動を遂行するために必要な語学スキルの習得やインターンシップの機会を提供することが求められる。

- 山梨学院大学で身につけたコンピテンスを、「5.かなり身に付けた」と「4.ほぼ身に付けた」の割合を合わせてランク付けした結果、卒業生によって最も高く評価された上位3項目と下位3項目は以下の通りとなった。

上位3つのコンピテンス	割合	上位
f. 環境に適応する力や自己管理する力	77.8%	第1位

g. 自己を理解し、適切な目標を設定し、達成するまでやり抜く力	76.5%	第2位
k. 人柄・倫理観・責任意識	74.6%	第3位

下位3つのコンピテンス	割合	下位
i. 資格の数	42.5%	第1位
m. コンピューターを扱う知識・技術	26.2%	第2位
c. 学際的な知識・技術	22.9%	第3位

- この結果から、本学の教育を通して、卒業生が特に倫理観、柔軟性、自己認識といった「ソフトスキル」を高く身につけたと評価されることが明らかになった。一方、本学の卒業生は有している資格の数は少なく、コンピューターを扱う知識・技術及びの習得が比較的弱い傾向がある。一定の資格を持つことは、卒業生の専門性の証明、キャリア選択の多様性、自己成長及び信頼性の向上というメリットにつながると考えられる。よって、就職活動における競争力を高め、今後のキャリアアップを促進させるために、資格取得に基づく教育及び指導が必要であると指摘できる。
- 本学の教育・キャンパスライフ全般に関して、「とても満足している」(27%)、「大体満足している」(50%)、と回答した卒業生の割合を合計すると、77%の卒業生が本学の教育・キャンパスライフに肯定的な評価をしていることがわかった。

<第3部 卒業後の就職・仕事状況から見た本学の教育効果>

- 主な勤務先の業種は、「公務」(14%)、「卸売・小売業」(13%)、その他(10%)、「製造業」(8%)、「教育・学修支援業」(8%)、「金融・保険業」(7%)、「医療、福祉」(5%)、「情報通信業」(5%)、である。
- 回答のあった卒業生は、「販売従事者」(21%)、「事務従事者」(18%)、「サービス職業従事者」(7%)、「その他の専門的・技術的職業従事者」(7%)、「情報処理・通信技術者」(5%)といった職種に従事している。
- 現在働いている勤務先が何社目であるか尋ねたところ、「学部卒業後、転職なし、1社目」(71%)が最も多く、次いで、転職ある場合には、「2社目」(17%)、「その他」(7%)、「3社目」(4%)、「4社目」(1%)の順である。最初に就いた仕事から転職または退職した理由は、「新たなステップアップを図るため」(36%)、「自分の関心に合わなかった」(15%)、「労働時間での不満」(13%)、「収入面での不満」(10%)、「職場の人間関係」(10%)、が上位になっている。
- 現在の仕事で役に立っている学習経験を「5.かなり役立っている」と「4.ほぼ役に立っている」の割合を合わせてランク付けした結果、上位5位は以下の通りである。

現在の仕事に有用となる学修経験	割合	順位
l. 友達や人的ネットワークの作成	51.0%	第1位
j. 課外活動(部活・サークル・ボランティア)	46.4%	第3位
k. アルバイト	42.5%	第2位
a. 専門科目	33.3%	第4位
i. ゼミ	31.4%	第5位

- 昨年度の調査結果と同様に、正課の学修経験、およびそれを通じて身に付けたコンピテンスが卒業後の仕事で役に立っていると卒業生に認識されている。それに対して、課外活動や人的ネットワークの構築も卒業後の仕事に有用であると卒業生が考えていることがわかった。正課の活動と正課外の活動を両立させる仕組みを作ることは、本学の教育改善と質的転換を図る上で重要であると考えられる。
- 卒業生が考える、企業が採用で重視するコンピテンスを「5.かなり重視する」と「4.重視する」の割合を加算してランク付けした結果、上位5位は以下の通りとなった。

卒業生が考える、企業が採用で重視する能力	割合	順位	企業の回答の順位
m. 自己を理解し、適切な目標を設定し、達成するまでやり抜く力	75.1%	第1位	第2位:84.5%
p. 人柄・倫理観・責任意識	73.8%	第2位	第1位:96.9%
i. 環境を適応する力や自分を管理する力	69.9%	第3位	第3位:73.2%
o. 学んだ知識を用いて、社会の問題解決に活かす力	61.5%	第4位	第5位:70.1%
k. ものごとを批判的に吟味・検討・改善する能力	54.9%	第5位	第5位:25.4%

- 他方、「1.まったく重視しなかった」の割合でコンピテンスをランク付けした結果、上位5位は以下の通りとなった。

企業にまったく重視されなかった能力	割合	順位	企業の回答の順位
f. 海外留学経験	56.2%	第1位	第1位:46.4%
c. 推薦や紹介を受けること	37.9%	第2位	第5位:17.5%
p. 資格の数	31.4%	第3位	第6位:31.7%
g. 専門分野に関する知識・技術	27.5%	第4位	第4位:23.7%
a. 学部の種類	24.5%	第4位	第2位:37.1%

- 以上の結果から、推薦や紹介、資格の数、及び学部の種類といった「ハードスキル」より、人柄、環境適応力、問題解決力、批判的力といったソフトスキルは企業側によって採用時に重視されていると卒業生に認識されていることが分かった。また、企業側に同じ質問を行った結果、本学の卒業生の認識とほぼ一致していることが確認された。これは、本学の人材育成や教育改善において、長期的なキャリア展望及び個人成長に役に立つソフトスキルや汎用的能力の育成が重要であることを示唆している。
- 一方、2022年度、2023年度の卒業生調査結果及び、2022年度と2023年度の企業調査結果と同様に、回答した卒業生は、海外留学経験や国際能力の習得が重要であるという認識が弱いという傾向が読み取れる。これは、卒業生が従事している仕事は国際業務に関連性が低い可能性があることと推測される。しかし、国際化が進む現代社会において、海外留学経験、国際的視野、外国語力といった能力が不可欠であることはますます認識されていくことが予測される。よって、本調査の結果から見える本学の卒業生の国際視野の限界を踏まえ、国際社会に対応できる人材を育成するための取り組みを検討する必要がある。

- 卒業後の仕事に対する満足度に関して、「とても満足している」「大体満足している」と回答した割合を合算した結果、73%の卒業生は現在の仕事に満足していることが分かった。また、仕事以外の生活の満足度に関して、「とても満足している」「大体満足している」と回答した割合を合算すると、昨年度の結果とほぼ変わらず、84%の卒業生は、現在の生活に満足していることが示された。今年の調査結果から見ると、本学の卒業生の多くは、仕事と生活のいずれに対しても満足度が高いことが確認される。

<第4部 学習経験の総合評価と本学に対する愛着度>

● 本学への投資価値

- ① 18歳の時点に戻り、再度高校卒業後の進路選択ができると仮定した場合、「四年制大学に行く」と考える卒業生の割合が最も多く、93%に達し、「専門学校に行く」(3%)、「進学しない」(2%)、「浪人」(1%)、そして「短期大学に行く」(1%)の順となった。
 - ② さらに、「四年制大学に行く」と回答した卒業生に、再度18歳時点に戻ることができると仮定したら、同じ大学を選択するか尋ねたところ、「どちらとも言えない」(35.3%)と回答する卒業生が最も多く、次いで「選択したい」(24.8%)、「とても選択したい」(15.0%)、「選択したくない」(13.7%)、「あまり選択したくない」(11.1%)の順となった。「あまり選択したくない」「選択したくない」を合わせると、本学を再び選択しないと回答した卒業生はわずかの24.8%であるが、残りの75.2%の卒業生を再度選択したいとこのことが言えなく、「どちらとも言えない」を選択した学生は、3割を超えている。今後、如何にこの部分割合を減らし、再度本学に選択したい学生の割合を増えるのか課題になっている。
- 他方、同じ専門分野を再度選択するか尋ねたところ、「とても選択したい」(30.7%)と回答した割合が最も多く、次いで「選択したい」(27.5%)となった。これらの肯定的な回答を合わせた割合は68.2%となり、10人中7人弱の卒業生は自分の専門選択に後悔がなく、本学が取り組んでいる専門教育に肯定的な評価をしていることがわかった。

● 本学入学への評価

本学に入学してよかったと思っているかを尋ねた結果、「とてもそう思っている」(35%)と「そう思っている」(33%)と回答した卒業生は、68%となり、10人中7人弱の卒業生は、本学に入学してよかったと肯定的な評価をしていることがわかった。

● 本学への愛着度と課題

本学への愛着度については、本学への進学を他の人に推薦するか尋ねたところ、「どちらとも言えない」(40%)と回答した割合が最も多く、次いで「推薦する」(31%)、「とても推薦する」(12%)、「あまり推薦しない」(11%)、「全く推薦しない」(5%)となった。